

県美プレミアム

2015年 7.18<sup>土</sup> – 11.8<sup>日</sup>

《館外作品を中心とした小企画展》

**美術の中のかたち—手で見る造形**

**手塚愛子展 Stardust Letters—星々の文（ふみ）**



1. 手塚愛子《薄い膜、地下の森》2007年  
撮影者：市川勝弘（参考図版）

《収蔵品によるテーマ展》

**VS（ヴァーサス）—コレクション新旧対決！？**

- 「colorful?—色に思いをめぐらせてみる」
- 「メビウスの環—あいまいな境界のはざまを歩き来してみる」
- 「タテ vs ヨコ—“人” と “水” の場合」
- 「IN MY ROOM / ON THE ROAD—彫刻、そっと目をとじて」
- 「後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」
- 「コレクション新旧対決」



5. 奥田善巳《ネガへの挑戦》1967年

県美プレミアム

《館外作品を中心とした小企画展》

## 美術の中のかたち—手で見る造形 手塚愛子展 Stardust Letters—星々の文

《収蔵品によるテーマ展》

### VS (ヴァーサス)—コレクション新旧対決!?

#### 開催趣旨

今期県美プレミアムの見どころのひとつは、毎年この時期に開催している小企画「美術の中のかたち—手で見る造形」展。26回目となる今回は、手塚愛子（てづか・あいこ 1976年東京都生）氏を出展作家に迎え、「点字」をモチーフとしたインスタレーションを発表します。もうひとつの見どころは、「VS—コレクション新旧対決!？」。昨年度新たに当館に所蔵された作品と、それまでに収蔵してきた作品とを、複数のテーマに沿って「対決」するように展示を試みることで、新収蔵品のお披露目とともに、40数年にわたって展開してきた当館の収集活動の一端を紹介します。

#### 会期等

2015年7月18日（土）—11月8日（日）

休館日：毎週月曜日（ただし7月20日、9月21日、10月12日は開館）、  
7月21日（火）、9月24日（木）、10月13日（火）

開館時間：午前10時—午後6時

特別展開催中の金・土曜日は夜間開館（午後8時まで）

※入場は閉館の30分前まで

#### 広報用画像について

このプレスリリースに掲載されている画像データをプレス掲載用にご用意しております。別紙の申込書をご使用ください。

兵庫県立美術館は、前身の近代美術館時代から数えて約45年にわたり収集活動を続けてきました。現在9,000点を超える作品を収蔵しており、それらはこれまでの収集方針を反映して、国内外の近代彫刻と版画、日本近代の名作、兵庫ゆかりの作品、関西の現代美術に大別されるとしても、内容は実に多岐にわたり、一瞥しただけではその総体をとらえきれません。そこで、当館では、1年を3期に区切り、個々に展示のテーマを設けることによって、横断的にコレクションを紹介し、変化ある常設展示室の演出を心がけています。

会場：兵庫県立美術館 常設展示室（1階・2階）

《収蔵品によるテーマ展》

VS (ヴァーサス)—コレクション新旧対決!?

colorful?—色に思いをめぐらせてみる 展示室1

メビウスの環 展示室2

—あまいな境界のはざまを歩き来してみる

タテvsヨコ—“人”と“水”の場合 展示室3

IN MY ROOM / ON THE ROAD 展示室5

—彫刻、そっと目をとじて + 安藤忠雄コーナー

後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。

小磯良平記念室・金山平三記念室

コレクション新旧対決 展示室6

《館外作品を中心とした小企画展》 展示室4

美術の中のかたち—手で見る造形

手塚愛子展 Stardust Letters—星々の文（ふみ）

#### 観覧料

観覧料	当日	団体	セット
一般	510円	410円	306円
大学生	410円	330円	246円
高校生	260円	210円	156円
中学生	無料		

団体料金……20名以上の料金

セット料金……特別展とのセット割引料金

※65歳以上は一般料金の半額

※障がいのある方とその介護の方1名は無料

※9月30日（水）まではクールスポット指定期間として、上記各観覧料金の半額となります。

展覧会構成 《館外作品を中心とした小企画展》

展示室 4

美術の中のかたち—手で見る造形  
**手塚愛子展 Stardust Letters — 星々の文 (ふみ)**

兵庫県立美術館では、平成元（1989）年度より「美術の中のかたち—手で見る造形」展を開催してきました。視覚に障がいのある方にも美術館に来ていただきたいという思いから始まったもので、視覚にかたよりがちな美術鑑賞のあり方を問い直すことを目的としています。現在活躍中の美術家に、手で触ることのできる作品を出品していただき、多彩な展示を行ってきました。

26 回目となる今年は、手塚愛子（てづか・あいこ）氏の新作を展示します。手塚氏は 1976 年、東京都に生まれ、武蔵野美術大学・同大学院をへて、2005 年に京都市立芸術大学大学院を修了。近年はベルリンを拠点として精力的に活動を続けています。糸を用いた今回のインスタレーションは、「点字」をモチーフとしています。触覚だけでなく、想像力を言語の領域へ広げ、さまざまな鑑賞を促します。



Photo : Jaime S. Martinez

**作家略歴 手塚愛子**

- 1976 年 東京都生まれ
  - 1999 年 武蔵野美術大学 造形学部油絵学科 卒業
  - 2001 年 武蔵野美術大学大学院  
造形研究科油絵コース 修了
  - 2005 年 京都市立芸術大学大学院  
美術研究科 博士（後期）課程  
油画領域 修了
  - 2010 年 五島記念文化賞 新人賞により渡英
  - 2011 年 文化庁新進芸術家海外研修制度により  
2年派遣研究員として渡欧
- 現在、ドイツ・ベルリン在住



**【主な個展】**

- 2011 年 プリズム・ラゲ—手塚愛子の糸、モネとシニャックの色（アサヒビール大山崎山荘美術館）
- 2013 年 Ghost-Suspended Organs（クンストラーハウス・ベタニエン／ドイツ）  
Rewoven（Galerie Michael Janssen /ドイツ）
- 2014 年 Thin Membrane, Pictures Come Down（Dortmunder Kunstverein /ドイツ）  
Certainty / Entropy（Mikiko Sato Gallery /ドイツ）  
Certainty / Entropy（Third Floor Hermès Singapore /シンガポール）
- 2015 年 Unraveling, Restoring（アヤラ美術館／フィリピン）  
Lessons for Restoration（MAGO /ノルウェイ）

**【主なグループ展】**

- 2008 年 タンジェントアーティスト・イン・レジデンス・プログラム 2008 春（国際芸術センター青森）  
MOT アニュアル 2008 解きほぐすとき（東京都現代美術館）
- 2009 年 City net Asia（ソウル市立美術館／韓国）  
ステッチ・バイ・ステッチ 針と糸で描く私（東京都庭園美術館）
- 2010 年 祝祭と祈りのテキスタイル（熊本市現代美術館）
- 2013 年 To Open Eyes, Art and Textiles from the Bauhaus to Today  
（クンストラレ・ビーレフェルト／ドイツ）  
The Empire of Folds（チューリヒ造形美術館／スイス）
- 2014 年 想像しなおし（福岡市美術館）
- 2015 年 TOMROM（Sandefjord kunstforening, Larvik kunstforening /ノルウェイ）

1・2ともに参考図版

手塚愛子《薄い膜、地下の森》2007年  
 撮影者：市川勝弘

## 展覧会構成 《館蔵品によるテーマ展》

展示室 1・2・3・5・6 小磯良平記念室・金山平三記念室

### VS (ヴァーサス)ーコレクション新旧対決！？

昨年度新たに当館に所蔵された作品と、それまでに収蔵してきた作品とを、複数のテーマに沿って「対決」するように展示を試みることで、新収蔵品のお披露目とともに、40 数年にわたって展開してきた当館の収集活動の一端を紹介します。

\* 下線部が新収蔵品

#### 展示室 1

### colorful? 一色に思いをめぐらせてみる

わたしたちがよく耳にし口にする「色彩豊か」といったことばは、果たして何に由来するのでしょうか？色の数でしょうか？それとも隣り合わせの色の差なのでしょうか？

この展示室ではそうした「色彩豊か=colorful」ということについて、思いをめぐらせていただく現代作品を展示します。

白髪一雄（1924-2008）の足で大胆に描かれた作品、田中敦子（1932-2005）の電球の点滅を想起させる円と線の増殖、奥田善巳（1931-2011）の画面上を縦横に繰り広げられる筆のタッチは、それぞれ色違いの作品を並べることによって、どのような印象がもたらされるか、お楽しみください。

- ・白髪一雄《黄帝》1963年
- ・金山明《作品》1957年
- ・田中敦子《作品》1961年
- ・奥田善巳《co-653》1992年 ほか



3. 白髪一雄《黄帝》1963年 山村コレクション



4. 白髪一雄《天罪星短命二郎》1960年

展示室 2

メビウスの環

— あいまいな境界のはざまを歩き来してみる

ひとひねりするだけで“オモテ”と“ウラ”が消えてなくなる「メビウスの環」。本来対決するはずのふたつの要素が、そこではいつのまにかその違いをあいまいにされ、またその違いが消滅されてしまいます。この展示室では、そうしたふたつの間柄をひとひねりすることで、危うく、ややこしく、あいまいになる、新たな表現をめざした作品を展示します。

背景の色面のみが画面に描かれ、かえって描かれていないものが画面上に立ち現れるかのような奥田善巳の<ネガへの挑発>シリーズのほか、写された自作の立体作品とともに展示されることも意図された小林且典（1961-）の写真作品では、その立体作品が今回は展示されないことでかえって写真作品としての強度や立体作品の不在を見る人に突きつけます。

- ・福田繁雄《SAMPLE》1977年
- ・関根伸夫《メビウスの環》1979年
- ・奥田善巳《ネガへの挑発》1967年
- ・小林且典《w015-2012》2012年 ほか



5. 奥田善巳《ネガへの挑発》1967年



6. 奥田善巳《ネガへの挑発》1967年



7. 奥田善巳《ネガへの挑発》1967年

展示室 3

タテ vs ヨコ — “人” と “水” の場合

美術作品を鑑賞するとき、垂直や水平といった構図や構成を意識することがあります。作品を作り出すうえで決定的な要因ともなる「垂直＝タテ」や「水平＝ヨコ」の要素について、“人”と“水”をモチーフとした作品からひもときます。

舟越保武（1912-2002）やアーキペンコ（1887-1964）らの彫刻作品に見られる人体表現に対して、ヘラクレスのような男性の肉体が抽象的な空間に浮遊感をもって配置されたイタタニミチコ（1948-）の大作との競演、金山平三（1883-1964）や鍋井克之（1888-1969）らの噴水を描いた油彩画に対して、森口宏一（1930-2011）の水をほうふつとさせる立体作品との競演などを、それぞれお楽しみください。

- ・舟越保武《ダミアン神父》1975年
- ・アレクサンダー・アーキペンコ《空間にあるトルソ》1936年
- ・イタタニミチコ《無題（「ハイポイント・コンタクト」より）》1993年
- ・森口宏一《横たわる青》1995年 ほか



8. イタタニミチコ《無題（「ハイポイント・コンタクト」より）》1993年



9. 森口宏一《横たわる青》1995年

展示室 5

IN MY ROOM / ON THE ROAD

—彫刻、そっと目をとじて + 安藤忠雄コーナー

前回に引き続き、ブロンズや木、鉄などのさまざまな素材で制作された彫刻作品を展示します。人の姿のいくつかの彫刻作品は、かたちや面を目でとらえる楽しみ以上に、わたしたちを内省に向かわせます。また、当館の設計者である建築家、安藤忠雄（1941-）の業績の一部を、模型、写真、映像などで紹介するコーナーを展示室東側に併設します。

- ・ジョージ・シーガル《ラッシュ・アワー》1983年
- ・ルイズ・ネヴェルスン《セルフ・ポートレート：サイレント・ミュージックⅣ》1964年  
ほか



10. オーギュスト・ロダン《オルフェウス》1892年



11. ヴィルヘルム・レームブルック《女性のトルソ》1910-14年

小磯良平記念室・金山平三記念室

後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。

神戸生まれの小磯良平（1903-1988）は、近代洋画を代表する巨匠のひとりです。確かなデッサン力に裏打ちされた人物像、とりわけ気品あふれる女性像は、現在も高い人気を誇っています。

一方の金山平三は同じく神戸生まれ、早いうちに官展で実力を認められましたが後に画壇と距離を置き、日本各地を旅行して描いた風景画で有名となります。当館を代表する作家であるこの小磯良平、金山平三作品については、それぞれ記念室を設けて常時その画業を鑑賞できるようにしています。

今回は「後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」という共通テーマのもとに、両記念室でそれぞれ当館の収蔵順に作品を展示し、コレクションが形成された流れを追っていきます。



12. 金山平三《雨のプラス・ピガール》1915年

展示室 6

## コレクション新旧対決

開館当初からのコレクションとそれ以降昨年度までに收藏された洋画や日本画を、それぞれの作家ごとにまとめて展示します。日本画は会期中展示替えをします。

- ・中西勝《ウム（鳥）》1962年
- ・上村松篁《八仙花》（前期展示）
- ・昇外義《雪彦之図》（後期展示） ほか



13. 新井完《鹿の本生譚》1927年



14. ヴィクトール・パリモフ  
《作品（労働者らは工場から帰る）》1920年頃

## 関連事業

### (1) アーティスト・トーク（兵庫県立美術館「芸術の館友の会」共催事業）

講師：手塚愛子（出展作家）

7月18日（土）午後4時～午後5時（午後3時30分より開場）

レクチャールームにて 定員100名

聴講無料

### (2) 学芸員によるギャラリートーク

8月8日（土）（1階展示室）

10月10日（土）（2階展示室）

いずれも午後4時より（約40分）

参加無料・要観覧券、エントランスに集合

### (3) ミュージアム・ボランティアによるガイドツアー

会期中の金・土・日曜日 午後1時より（約45分）

参加無料・要観覧券、エントランスに集合

## お問い合わせ先

### 兵庫県立美術館

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1  
 TEL: 078-262-0901 (代表) FAX: 078-262-0903

### 取材・写真提供に関すること

#### 営業・広報グループ

TEL: 078-262-0905 (グループ直通) FAX: 078-262-0903

### 展示内容に関すること

#### 特集 VS (ヴァーサス) —コレクション新旧対決! ?

担当学芸員: 相良周作・飯尾由貴子

e-mail: sagara@artm.pref.hyogo.jp (相良)

TEL: 078-262-0909 (学芸直通) FAX: 078-262-0913

#### 小企画 美術の中のかたち—手で見る造形

##### 手塚愛子展 Stardust Letters—星々の文

担当学芸員: 鈴木慈子・小林公

e-mail: suzuki@artm.pref.hyogo.jp (鈴木)

TEL: 078-262-0909 (学芸直通) FAX: 078-262-0913

### 交通案内

阪神岩屋駅(兵庫県立美術館前)から南に徒歩約8分

JR神戸線灘駅から南に徒歩約10分

阪急神戸線王子公園駅から南西に徒歩約20分

神戸市バス・阪神バス「県立美術館前」下車すぐ

地下駐車場: 乗用車80台収容・有料

\*ご来館はなるべく電車・バスをご利用ください

\*団体バスでお越しの場合は、バス待機所の予約をお願いします



### 同時開催の展覧会

#### 舟越桂 私の中のスフィンクス

6月27日(土)ー8月30日(日)

会場: 兵庫県立美術館 企画展示室

#### (共催展)

#### 天野喜孝展 想像を超えた世界

6月27日(土)ー8月30日(日)

会場: 兵庫県立美術館 ギャラリー棟3階

#### パウル・クレー だれにもないしょ。

9月19日(日)ー11月23日(月・祝)

会場: 兵庫県立美術館 企画展示室

#### 神戸ビエンナーレ2015 ニッポンのマンガ\*アニメ\*ゲーム

9月19日(土)ー11月23日(月・祝)

会場: 兵庫県立美術館 ギャラリー棟3階

#### チャンネル6 国谷隆志展 (仮題)

10月29日(木)ー11月29日(日)

会場: 兵庫県立美術館 アトリエ1

### 横尾忠則現代美術館での同時開催\*

#### 横尾忠則展 カット&ペースト 切った貼ったの大立ち回り

4月18日(土)ー7月20日(月・祝)

#### 横尾忠則 続・Y字路

8月8日(土)ー11月23日(月・祝)

\*特別展又は県美プレミアムのチケット(半券可)のご提示で、  
 団体割引料金でご覧いただけます。



《小企画》 美術の中のかたち—手で見る造形

手塚愛子展 Stardust Letters—星々の文（ふみ）

《特集》

VS（ヴァーサス）—コレクション新旧対決!?

2015年7月18日（土）～11月8日（日）

広報画像申込書

営業・広報グループ 宛 FAX (078) 262-0903

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通 1-1-1 電話 (078) 262-0905 (直通)

ご希望の画像の番号に○をつけてください。後日データ (.jpg) をお送りいたします。

番号	作家名・作品名・制作年 など
1	手塚愛子《薄い膜、地下の森》2007年 撮影者：市川勝弘（参考図版）
2	手塚愛子《薄い膜、地下の森》2007年 撮影者：市川勝弘（参考図版）
3	白髪一雄《黄帝》1963年 山村コレクション
4	白髪一雄《天罪星短命二郎》1960年
5	奥田善巳《ネガへの挑発》1967年
6	奥田善巳《ネガへの挑発》1967年
7	奥田善巳《ネガへの挑発》1967年
8	イタタニ ミチコ《無題（「ハイポイント・コンタクト」より）》1993年
9	森口宏一《横たわる青》1995年
10	オーギュスト・ロダン《オルフェウス》1892年
11	ヴィルヘルム・レームブルック《女性のトルソ》1910-14年
12	金山平三《雨のプラス・ピガール》1915年
13	新井完《鹿の本生譚》1927年
14	ヴィクトール・パリモフ《作品（労働者らは工場から帰る）》1920年頃

※上記画像を媒体掲載される際には、記載の**作家名・作品名・制作年**などを必ず入れてください。

※画像データ使用は、**本展覧会の紹介用のみ**とさせていただきます。それ以外での使用はできません。（会期終了まで）

※トリミングおよび文字や他のイメージを重ねることはできません。

貴社名			
媒体名	新聞・雑誌・ミニコミ 『 』 TV・ラジオ・インターネット		
ご担当者名			
ご住所	〒		
電話番号		FAX	
メールアドレス	@		
URL			
掲載・放送予定日		画像到着希望日	
読者・視聴者プレゼント用招待券（最大5組10名まで 本展を媒体でご紹介いただける場合に限り）	組 名分希望		

※本展に関する記事をご掲載いただきました際には、お手数ですが、**掲載誌・紙または記録媒体（VTR/DVD）、URL**などを、**上記営業・広報宛**にお送りくださいますようお願いいたします。

※展覧会場の取材、撮影をご希望の場合は、上記までご連絡ください。事前にご連絡のない取材・撮影はお断りいたします。